

蘆花徳富健次郎

中野好夫著 蘆花徳富健次郎 第一部

純粹無雜で変質者にまごう烈しい真実の追求者、しかも矛盾・撞着の人でもあった作家蘆花の稀有な人間像の全体を描く伝記文学の眉。第一部は出生から出世作「不如帰」まで
(全三部作)

筑摩書房 定価1200円

1095-82040-4604

中野好夫

第一部

蘆花徳田健次郎

筑摩書房

蘆花徳富健次郎第一部

昭和四十七年三月二十五日 初版第一刷発行

定価一二〇〇円

著者 © 中野好夫

発行者 竹之内静雄

発行所 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八

郵便番号 一〇一—九一

電話 東京 (二九二) 七六五一

振替 東京 四一一二三

印刷 永興社
製本 永興社

蘆花徳富健次郎 第一部 目次

序	この人を見よ エノケ・オモ	三
一	生立ちと背景	二六
二	少年健次郎	五三
三	官許同志社英学校	七
四	“賢兄愚弟”	一〇四
五	同志社再入学	一三九
六	茶色の目	一四九
七	嗟呼、国民之友生れたり	二〇〇
八	編集局の片隅で	二二五
九	結婚	二四〇

十 得意と失意

二六五

十一 逗子柳屋

三二三

十二 不如婦

三四六

附録 蘆花探訪拾遺

三八七

1 矢島樺子の告白について

三八九

2 蘆花の生年月日

三九六

3 富と富

四〇五

4 熊本洋学校と蘆花

四〇八

5 雅号「蘆花」について

四一三

6 「みだれあし」考

四一六

資料 みだれあし

四二三

あとがき

四五三

蘆花徳富健次郎

第一部

序 ユッケ・ホモ この人を見よ

まず小さな挿話からはじめることにする。

徳富蘆花晩年の短文に、「二つの秘密を残して死んだ叔母の霊前に捧ぐ」、同じく「矢島叔母の絶筆について」と題する二篇がある。前者は大正十四年八月号の「婦人の国」、後者も同じ年八月号の「婦人公論」に、つまり、ほとんど同時に発表されたものである。（新潮社版「蘆花全集」ならば、いずれも第十九巻に収められている。）

ここに矢島叔母とあるのは、本名矢島榊子（戸籍名は勝子）、蘆花の母の妹、すなわち叔母にあたる。もともと、今日矢島榊子などといっても、もはや記憶する読者もほとんどいまいと思うから、まず簡単に紹介からはじめることにする。今日でこそいささか影の薄い存在になってしまったが、明治、大正期を通じて日本基督教婦人矯風会の、その創立者および会頭としての矢島、また女子学院初代院長としての彼女の存在は、好むと好まないにかかわらず、婦人運動史上、また女子教育界にあって、卓然として

巨星のように輝いていた。その矢島が大正十四年六月十六日には、九十三歳（以下すべて数え年による）の高齢をもって歿したわけだが、当然ながら、その死は叙位、叙勲、宮中よりの御下賜品、そして会葬者三千人と伝えられる盛大な葬儀をもって酬いられた。上記蘆花の二文は、まさしくその直後に書かれたものである。

両者はいずれも同趣旨のものだから、まとめて要約することにするが、前者「二つの秘密……」は、まず老叔母の死を悲しみながらも、「たゞ惜しむのは叔母は二つの大きな秘密を残して死んだことです。この秘密を解決しないで死んだことを憾みに思ひます。愛が足りなかつたのですね。私はその大きな謎の秘密を解決する日、懺悔する日をどんなにか期待してゐたことであらう。今度亡くなつたときも、私はそれが懺悔されてゐるか、または臨終の床の下にその自白があるか、その二つをどんなにか願つたことであらう。しかし叔母は私のその願ひをたうとう聴いてくれなかつた」という一節にはじまっている。そして、直ちに梶子叔母の隠されていた秘密について語りはじめるのである。

* 引用文のルビは以下すべて現代表記に改め、筆者が取捨を加えた。

事実については両文ともに同じだから、筆者の筆で要約することにするが、熊本県上益城郡津森村杉堂の旧家、郷士矢島家の六女梶子は、二十五歳で同郷の林某なる士分の三人目の後妻として嫁ぎ、一男二女を儲けた。だが、この林某というのが、大の酒呑みというよりも、むしろ酒乱癖であつたために、

三十五歳の明治元年には、ついにまだ襁褓むつきの中にあつた末娘の達子を懷に、十年間に近い結婚生活に終止符を打つたのである。以後五年間は、兄姉たちの縁家を転々として、いわゆる流浪時代ということになるが、明治五年にいたつて、はからずも新しい運命を迎えることになった。というのは、実家の兄である矢島家の当主源助直方が明治政府に登用され、相当の高官について単身上京していたのが、たまたま病に倒れた。ちょうど求めてもない看護婦役ということで、榊子が上京することになったからである。(このとき勝子をみずから榊子と改めたという。)直方の邸は当時の神田裏猿樂町、いまの明治大学裏の崖下、小公園あたりにあつたらしいが、長屋門があり、邸内には能舞台まで設けられていたという、八百坪をこえる大邸宅であつた。そこへ主人は単身赴任というのだから、当然大ぜいの女中、書生、食客などがゴロゴロしていた。榊子は、兄の看護ということもあつたが、おそらく家事取締りということも、任務の一つであつたに相違ない。幸い兄の病氣が癒えると、勝気な榊子はさっそく家政の改革に取りかかった。まず女中にはすべて暇を出し、家事は一切書生たちにやらせることにした。こうして放漫だった家計も一応整い、彼女自身も、まもなく小学校教員伝習所というのに入学して、将来独立自活の方途を樹てることになった。翌六年には、すでに小学校教員になっている。

そんなわけで、万事すべて順風満帆と見えたところに、蘆花のいわゆる第一の秘密が起つたのである。矢島家の書生の中に一人、東北の出身というのがいた。風采もよく、人間についても、兄直方は口をきわめて褒めていたらしい。四十女の心の隙というか、まもなく榊子はこの男と懇ろになり、ついに女兒妙子まで生み落す始末になった。ところが、困つたことに、この男は国許ですでに妻子持ちだった

のである。よくある話だが、さりとてこのまま放置することは許されない。協議の結果、生まれた子どもは里子に出し、男とは完全に手を切ることになったが、不幸な妙子は、ついに一生日陰の子にならなければならなかった。その後、楫子はこの罪の子を手許に引き取り、改めて「私に属するもの」、つまり、養女として育て上げ、やがて彼女自身が院長をしていた女子学院まで卒業させてやるが、秘密はついに明かさなかった。楫子の基督教入信はこの事件後であり、四十七歳の明治十二年には受洗、つづいて女子教育界、婦人運動の世界に乗り出すことになったのである。

さて、第二の秘密とは、成人後のこの妙子に関係する。彼女は、矢島、徳富両家の親類つづきである牧師某と結婚し、これまた子女を儲けることになるが、因果とでもいおうか、こんどは妙子が夫以外の男と過失を犯して破鏡になっている。蘆花の言葉をかりるならば、「父の愛を獲ぬ女子は夫に嫁しての後も、他の男に心を移し易い」ということだったのであろうか。（そういえば、楫子が懐にして林家を出た末娘達子もまた、後年人に嫁して、これは夫に棄てられる運命になったとある。こうしてみると、社会的栄光に包まれて死んだ矢島楫子女史も、家庭的にはまことに不幸な女であったといわねばならぬ。同情にたえないものがあるように思える。）

さて、これらの秘密は、ごく少数の近親者以外には、ほとんど最後まで完全に隠蔽されていたといつてよい。それを蘆花は、老叔母の死の直後において執拗に追求したのである。（「二つの秘密……」は、どうやら蘆花の談話をまとめたものらしく、記者の早合点か、達子と妙子の結婚後の運命を混同してしまっているから、注意を要する。）

蘆花はいう。「私は早くその懺悔がしてもらひたかつたのです。過去の秘密を隠してゐては叔母は人を導いたり、人に教へたりするところに嘘がある。……私はかう考へては、懺悔の一日も早からんことを願つて、毎日胸が躍るのでありました。が、叔母はつひに、懺悔しないで死んでしまひました。……知らない人を叔母が懺悔しないで導いたのは大きな罪惡であると私は思ひます。」(二つの秘密を残して死んだ叔母の靈前に捧ぐ)

「此上は神の前に馬鹿になつて一切を公に懺悔なさい。公的懺悔が必要です。」「基督教婦人矯風会を率ゆる叔母さんの事であつて見れば、公私一切が神人の前に分明でなければなりません。……何千人の会葬、何百通の弔電、花に埋もれた盛大な葬式も魂のぬけたもぬけのからで、叔母の一生の悲劇中、此の華やかな最後程皮肉な悲劇はない、と私は残念に堪へない」(「矢島叔母の絶筆について」とまで極言するのである。

もっとも、厳密に言えば、問題はなにもこの二つの文章をもつてはじまつたわけではない。蘆花は、時期もあらうに叔母の死が伝えられた翌朝(六月十七日)の「東京朝日」紙にも、すでに同じ趣旨の談話を発表していたのである。しかも、談話はたちまち全国の地方紙にまで転載された。当然それは、大きな社会的反響を捲き起さないではないなかつた。賛否両様といえはよいが、大勢はむしろ蘆花に不利であつたといつてよい。一々引用している暇はないが、たとえば週刊「婦女新聞」(七月五日号)は、公然と正面切つて蘆花に対する非難の社説をかかげた。かりに「之を事実としても、一切を世間的に告白しなければならぬといふ論拠はどこにあるのであらうか。……一切の罪惡も、之を心に悔いて神の前に、

若しくは神への取次人たる牧師の前に告白することによつて、淨められ宥さるるものではないのだらうか。況んや二つの秘密なるもの、共に罪惡と称すべき性質のものでなく、……人格的未熟から起つた不幸、若しくは過失にすぎない。そして其等の不幸や過失を體驗し、内省して、老女史の大なる人格は完成したのである」といい、「死屍を辱しむる無礼に公憤を禁じえない」とまで書いた。社説の筆者福島四郎は、むしろ故人に近い立場の人物であつたから、あるいはこれも当然の主張であつたかもしれぬが（もっとも、その福島ですらが、この秘密は「記者にも初耳であつた」と述べているのは注意に値する。それほど固く秘密は保たれていたのである）、実は正宗白鳥までが蘆花非難に一役を買っているのである。

同年十月号の雑誌「女性」所載の「白鳥雜筆」の中で彼は書いている（白鳥全集第七卷に收録）。「腰が曲つて皺が波を打つてゐる、九十過ぎの老婆をして、何十年か前の、人情がかつた所行の秘密話を、公衆に向つて涙をもつて懺悔させようとするのである。私にはそれが、云ひやうのない惡趣味のやうに思はれた。……おせつかいも甚しいと思はれた」という。それだけならまだいいが、さらにすすんで、「近年の文壇の風潮は、『不如帰』の作者をさへ、自伝小説に没頭させるやうに感化したのである。……都会や田舎の若い人の同人雑誌を時々読んで見ると、殆んど例外なしに、作者自身の日常生活や感想が、創作として掲げられてゐる。絵なら、皆んなが自画像ばかり書いてゐるのだ」とあるにいたつては、いかにも白鳥らしい発想とでもいうか、叔母への告白強要の真意を解しないのはまだしもとして、蘆花晩年のいわゆる告白的自伝文学までも、当時かいなでの糞自然主義告白文学とまったく同系列に見ている。

点など、これまたいかにも白鳥らしい見当ちがいといわなければならぬ。が、それにしても当時蘆花のこの言動が、一般世間的にはどう受けとめられたか、それを察する一例証にはなろうと思えるのだ。

それにしても、叔母矢島榊子が九十三歳という高齢であり、秘密といっても、すでに五十年以上も昔のそれであったことが拙かった。また、故人の人物については、甥の徳富猪一郎ですらが、その告別演説の中で、「故人の弱点、欠点、短所、不好所は、百も承知してゐます。私は如何なる具合であつたか、幼少より此叔母さんは嫌ひでありました」と告白せねばならなかつたほど、強引、冷徹、「愛せられるよりも寧ろ畏れられた」、「理智で打ち固めたやうな」性格だつただけに（いずれも上述告別演説からの引用）、近親、側近の間でもしばしば反撥、トラブルを生んでいたことは事実であつた。だが、それはあくまで直接に彼女を知る周辺の人たちとの問題であつて、なんにも知らぬ世間一般にとつては、なんといつても女子教育界、婦人運動界の輝かしい一大明星であり、ほとんど全日本的に世の尊崇をあつめていた矢島榊子女史であつた。そんなわけで、当面のこの問題に関するかぎり、大勢として世評が蘆花に不利であつたことは争えない。

ところが、実はこの問題、因縁するところは、はるかに遠く、かつ深かつたのである。そのためには、まずここで蘆花、榊子の血縁関係を、今少しより詳しく説明しておく必要がある。榊子が熊本県上益城郡の惣庄屋格という旧家矢島家の出であることは先に述べた。彼女はその矢島家の兄姉妹八人という同胞の季から二番目の娘として生まれた。たまたま姉久子がこれも旧家の徳富家に嫁し、蘇峰、蘆花などを生んだために、叔母、甥の關係になつたのである。榊子は幼時から「浚柿」という綽名あだなをもつて呼

ばれていたという。偶然ではあるが、勝子というその幼名が象徴するように、性来おそろしく気の強い少女であつたらしい。それにはこんな事実も考えられる。当時矢島家では、一人の男子直方を除いて、女ばかり上から五人もつづいて生まれたために、あとにひたすら待たれていたのは男子であつた。そこへまたしても女子榊子が出生したというのだから、ひどくみんなから疎まれ、家族の温かい愛情というものには必ずしも恵まれなかつたということである。そのことが、性来の勝ち気とも相俟つて、「渋柿」と綽名されるような、後天的性質をつくる素因になつたということも、一応は考えられるかもしれない。具体例は省略するが、そうした榊子の男勝りの逸話は、娘時代から数多く伝えられている。そして、それらがまた彼女を愛される榊子にしなかつたのである。

そうした榊子が二十五歳で結婚し、十年後の三十五歳にはみずからすすんで家庭を棄てる結果になつたことは、これまたすでに述べた。夫七郎というのは、平生は「竹を割つたような」人物だつたらしいが、ひとたび酒を飲むと、白刃を抜いて暴れまわるといふ文字通りの酒乱であつたらしい。したがって、幾度かの別居騒ぎのあと、榊子がついに幕末版ノラともいふべき家出に踏み切つたには、必ずしも理由なしとはいへぬが、ただその離婚ぶりというのは、やはりいかにも榊子らしい。酔いのさめた夫七郎は、両手について復縁を求めたにもかかわらず、榊子はブツリと黒髪を切つて夫の前に差し出した。これでは七郎も諦めるよりほかなく、離婚が成立したというのだが、少なくとも彼女の戦闘的性情を示す一端の挿話にはなろう。そんなわけで、多くの姉妹中、男勝りにかけては徳富兄弟の母久子と双璧で、姉姉、甥姪たちからは必ずしも好意をもたれていなかった。あの世俗人猪一郎をしてさえ、告別演説の中で

「此の叔母は嫌ひであつた」という率直な言を吐かせているほどである。

それが、より激情的な性格である蘆花との関係になると、いっそういけなかった。矢島樺子のことは、蘆花の作品「竹崎順子」、「富士」などにもしばしば出るが、もっとも露骨な感情表出は「新春」にある。それは今回の問題が起る数年前の大正六—七年に書かれているわけだが、

「私には母方の叔母に当る大俗物の天保婆も居ました。……愛の目を以て人を見ることを得^え為^せぬ彼女は、父（註—徳富兄弟の父一敬）を包む薄皮の為に父を輕蔑して居ました。父に肖^にた私も輕蔑しました。私は之を怒ります。天保婆は愛の人ではありません。霊の人ではありません。單に事務の人です。彼女は自然を輕蔑し、愛を輕蔑し、畢竟神を輕蔑する人であります。……彼女は其夫の心に分け入り得ず、行為に夫の罪を咎め、身を捨て、其夫を救ひ得なかつた高慢の女であります。彼女の矯風事業は、男に対する復讐と自ら義とする為の事業で、眞の愛に根ざした事業ではありません。彼女が統^すぶる基督教婦人矯風会が千百の善事功德をなせばとて、それは会頭たる彼女自身を救ふことは出来ません。それは彼女は高慢だからであります」と、以下まだこの調子で綿々とつづくのである。（「新春」——「春信」四）

まことにこれは手厳しいが、それにしても、なぜまた蘆花は、九十三歳の死の直後に當って、記者への談話、二つの公開文まで書いて、一挙に暴露を敢えてしたのであろうか。それにはいま一つ、さらに別の事情があつたのである。というのは、樺子の死に先立つ三年、大正十一年十月二十八日のことであるが、上述「矢島叔母の絶筆」にも書かれているように、蘆花夫妻はすでに病床にあつた樺子叔母を実に十年ぶりに訪ねている。だが、喜び迎える彼女に対して、彼が打ち出したものは、これら秘密の社会